和歌山県の気候変動

将来予測について

21世紀末の予測：
気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第5次評価報告書※1で用いられた2つのシナリオ（RCP2.6とRCP8.5）に基づく、20世紀末と比べた21世紀末※2の予測を記載しています。

RCP2.6シナリオ：
将来の世界平均気温が、工業化以前※3と比べて約2℃上昇することが想定されているシナリオで、

「 **2℃上昇シナリオ** 」

と表記しています。

パリ協定の2℃目標が達成された世界に相当し、IPCC第6次評価報告書では、SSP1-2.6シナリオに近いものです。

RCP8.5シナリオ：
将来の世界平均気温が、工業化以前※3と比べて約4℃上昇することが想定されているシナリオで、

「 **4℃上昇シナリオ** 」

と表記しています。

追加的な緩和策を取らなかった世界に相当し、IPCC第6次評価報告書では、SSP5-8.5シナリオに近いものです。

温暖化の程度に応じた予測：
20世紀末※2では100年に一回の頻度で発生していたような大雨が、工業化以前※3と比べて世界平均気温がそれぞれ**1.5℃、2℃、4℃**上昇した場合、どれくらいの頻度で発生するかを記載しています。なお、ここでは1日の降水量（日降水量）を解析しています。また、2℃上昇シナリオと4℃上昇シナリオにおいて、1.5℃、2℃、4℃それぞれの温度上昇が見込まれる、おおよその年代をそえて解説しています。

※1 最新のIPCC報告書は第6次評価報告書ですが、日本付近の予測で参照可能な結果の多くは第5次評価報告書に基づくためです。
※2「21世紀末の予測」で用いる、20世紀末は1980～1999年（海面水温は1986～2005年）の平均、21世紀末は2076～2095年（同、2081～2100年）の平均です。「温暖化の程度に応じた予測」では、20世紀末は1981～2010年です。
※3 工業化以前は1850～1900年の平均です。

全国の情報はこちら

日本の気候変動2025
（文部科学省・気象庁、令和7年3月公表）

日本の気候変動の現状と予測に関する最新の知見を紹介

気象庁ホームページからご覧ください↓

解説動画はこちらから↓

気候変動の影響と適応

気候変動適応情報プラットフォーム
（A-PLAT（国立環境研究所））

気候変動は様々な分野に影響を及ぼします。具体的な影響やそれに対応するための適応策については、A-PLATも参照ください。

気候変動適応　検索

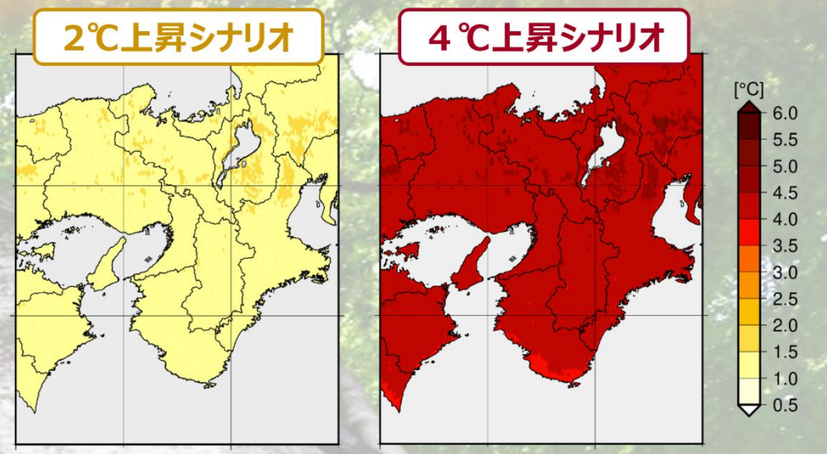
A-PLAT

A-PLATのホームページ

和歌山地方気象台　和歌山県和歌山市男野芝丁4　TEL: 073-422-5348

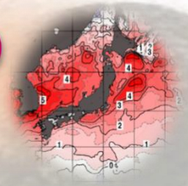
気温の上昇

大雨の増加

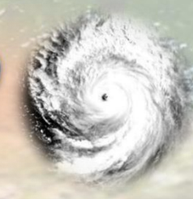


年平均気温の将来予測（21世紀末）
20世紀末からの上昇量（シナリオ等の詳細は裏面参照）
狭い領域の変化は不確実性が大きいため、都道府県程度の広範囲の変化に着目ください

海面水温の上昇



台風強度の増大



このリーフレットでは、「日本の気候変動2025」（文部科学省・気象庁）に基づき、これまでの気候の変化と将来予測に関する情報をまとめています。
近畿地方の気候の変化については、気象庁ホームページからもご覧になれます。

気象庁ホームページ「日本の各地域における気候の変化」

令和7年3月
和歌山地方気象台

気温の上昇

これまでの変化

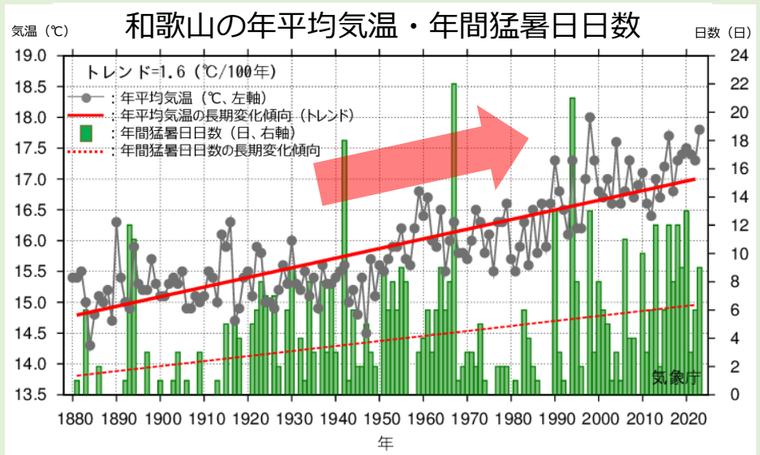
100年あたり
1.6℃上昇※

※右のグラフのデータから算出した
100年あたりの平均的な上昇率です。

各要素の最新の変化傾向は、A-PLAT「気象観測データの長期変化の傾向」をご覧ください。

A-PLAT

https://adaptation-platform.nies.go.jp/data/jma-obs/index.html



21世紀末の予測

熱中症等のリスク増加

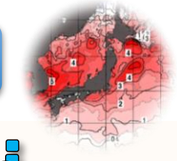
和歌山県の**年平均気温**は、20世紀末と比べて、
2℃上昇シナリオで約**1.3℃**、4℃上昇シナリオで約**4.1℃**上昇

年間猛暑日日数	2日	**約5日** / **約25日**
年間熱帯夜日数	9日	**約22日** / **約64日**

日数は左から、和歌山県平均の20世紀末の観測値、21世紀末（2℃ / 4℃上昇シナリオ）の予測値

猛暑日は日最高気温が35℃以上の日です。
熱帯夜は夜間の最低気温が25℃以上の日を指しますが、ここでは便宜上、日最低気温が25℃以上の日を熱帯夜として扱っています。

海面水温の上昇

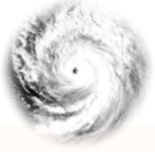


21世紀末の予測

四国・東海沖の**年平均海面水温**は、20世紀末と比べて、
2℃上昇シナリオでは約**1.01℃**、
4℃上昇シナリオでは約**3.04℃**上昇

四国・東海沖が示す海域は、気象庁ホームページ「海面水温の長期変化傾向(日本近海)」を参照ください。

台風強度の増大



将来予測※1

日本付近の台風強度※2は**強まる**
台風に伴う降水量も**増加**

※1 温暖化に伴う台風の変化を解析した様々な研究結果に基づきます。
※2 中心付近の気圧または風の強さ

大雨の増加

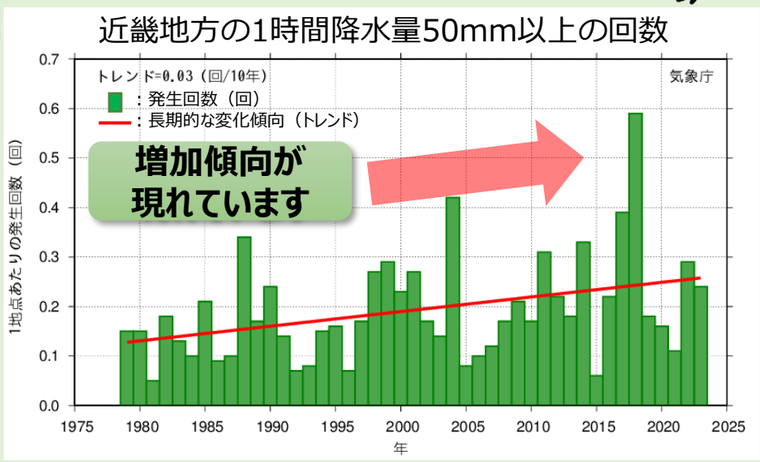
これまでの変化

気象庁では、甚大な被害をもたらした「平成30年7月豪雨」には、地球温暖化に伴う水蒸気量の増加も影響したと評価しています。

最新の変化傾向は、A-PLAT「気象観測データの長期変化の傾向」をご覧ください。

A-PLAT

https://adaptation-platform.nies.go.jp/data/jma-obs/index.html



21世紀末の予測

傘は全く役に立たなくなるような降り方です

近畿地方の**1時間降水量50mm以上の年間発生回数**は、20世紀末と比べて、
2℃上昇シナリオでは約**1.8倍**、4℃上昇シナリオでは約**2.7倍**に増加

土砂災害や洪水等の災害リスク増加

温暖化の程度に応じた予測

各シナリオにおけるおおよその年代
2°C上昇シナリオ (SSP1-2.6)
4°C上昇シナリオ (SSP5-8.5)

20世紀末には100年に一回しか起こらなかった大雨※1が**より頻繁に**

近畿地方の予測	温暖化の程度	1.5℃上昇	2℃上昇	4℃上昇
	20世紀末	2023-2042年頃 / 2018-2037年頃	※2 / 2032-2051年頃	2075-2094年頃
100年当たりの発生頻度	1回	約1.5回	**約1.6回**	**約2.5回**

観測データ※3による推定では、100年に一回の大雨（日降水量）は、和歌山では約371mmです。温暖化が進むと、こうした大雨がより頻繁に発生します。

※1 ここでは日降水量に基づく結果を示します。
※2 2031-2050年頃に2℃上昇となる可能性はあります。
※3 1976-2023年のうち利用可能な観測データです。

詳しい情報は、気象庁ホームページ「極端現象発生頻度マップ」をご覧ください。

本リーフレット中の各アイコンは情報の空間スケールを示します：
ある地点の情報　都道府県スケールの情報　地方スケールの情報　全国スケールの情報